

原型

創刊号



俳句

離被架 安達 眞弓

手術前 猪狩 哲郎

虎杖の芽 猪狩與四男

祖母の家 菊地 秋歩

五月雪嶺 高木 公園

夏はじまる 蛭田 親司

孤歌 深澤 啓三

雪現れて 町田 音彌

ズリ山 番場黒耀子

詩

冬のシゴト 三野混沌

落書のなかに 芳賀他郷

道 北畑一樹

点描 眞尾倍弘

戀愛 山崎栄子

それでいて 重森治昌

製靴読本 菅田 甫

魚。魚の眼 小倉倉三

表紙繪 山崎徳子

冬のシゴト

三野 混純

下駄がきれたらハタシデイケ
ハシエタが見えなかつたらハツテイケ
山の坂が岩カベが暗いボンギリシロ
アタラシイ木の葉がウツマク
カガリが林からとつたりやつたり
はたりと小屋の中になおれ
しまつた口をビツと開けたおとして
マミがクラヤミでナキマワル
おまへもナキマワルトイイ

小屋のヤブがうれしいとイイ
ランプが眠らないノニ
ランプどころかその眼が開いてイタカキなおイイ
ナンダ冬くさい
雪がいまにやつてきて
雪の上のマツバタカがやつてきて
まつくろけに焼けたおまへのアタマ
おまへのシゴト 雪に叩きだし

落書のなかに

芳賀他郷

切山の壁に

深く掘りつけられた

舟底型の女陰

三十年前私が生命と興へたものだ

苦むして底は見えない

風雪に耐えた刻りの深さが

當時の熱氣を傳へていまに新らしい

それかあらぬか大人になつた私は

妻を相手に眞屢莊嚴な落書を試みる

幸い子も産まれた

もはや來年は小学校へ行く年である

しかしこれとても消える

私も目らの落書のなかに没し去るだろう

道

北畑 一樹

誰ひとり通らなかつた

土壌は

黒光りに光り

僕は西陽に向いて歩いた

段丘の影が深さを増していた

太陽は

真赤に熔けはじめ

僕は喰入るようにそれを見つめた

羊齒の一群れが涼しい空気を呼んだ

その杖は

強靱に葉裏を支え

風は高々と空を掠めた

足跡が影を溜めてつづいた

道は

ひだの多い地層の間を縫っていた

僕は奈落の底をしつかり踏み固めて歩いた

点描

眞尾 倍弘

ある年の梅雨時から夏にかけて、僕は河南の小さな山に穿たれた穴の中に住んでいた。其処で僕は軍隊に隷属しながら、自分の自由な時間を見出しては、わづかな平穩を保つていた。

手榴彈をポケットに入れて、晴れた日の山道をのぼつてゆくことが、たしかに何ものかからはなれた氣持をおこさせていたのだ。

僕はいつもただ一人で出かけた。そのことによつてだけ僕

は僕の意志を知ることが出来たのだ。

山にはいたるところに同じような穴があつて、その中には骸骨や、未だぶちぶちとかすかな音をたてて腐つているかつての人間たちがいた。

僕はそれらの物体の上に僕自身のいのちをみつめながら、そのような存在の位置について考えていた。

あれから十いく年。僕はとおよそ味もそつけないぜんそくと結核に苦しみ、僕らの國のようにつかみどころのないにごつた頭で、生きてゆくことについて考えているのだ。

生きてゆくかざりはたえず表現しつづけなければならぬ意義について、あの河南の日での凝視をもつて僕は僕をみているのだ。

戀愛

山崎 栄子

刻々 セコントが二十世紀をきざむ

六分五十二秒

ヴェトナムの交叉點！

コロナが燃える

百萬度

プロミネンス

シャツターが下ろされた

南の海

太陽と月の名優

七色の無言劇

ノーベル

の破壊力は

月と胸を合せた

地上五マイル

毎分十六キロの風をはらむ

愛憎が

三分四十七秒のギャップを獲えた

二人の蹠音を大暗裡の中に見る

それでいて

星が餘りチカチカ皮肉に笑ふので沼の鮎は因り切つて
眼をぐるぐるさせました

ライターの火花のやうに皮肉な春の星

鮎は三月になつても未だ二月のようだと騒いで居ます

鮎の子は鮎を産み 星は自分の子を養子に流し 神経質

に笑ひます

鮎 星 水をのどきこむ白い顔の女 日本の浅い春は
天から沼の底まで皆意地悪で皮肉で 親切にされたら北
を向いて こつそり泣いてやらうと云つた顔付です

重 森 治 昌

製靴読本

菅 岡 甫

岩 の 足

海は風浪に吞まれてしまつた

永久に海はかえつてこなかつた

うつろな果て

塵芥の海

その死海の眞只中へ見る見る隆起する島がある

黒骸々の形相

全裸に盛る腐臭のぬえ

――ながい闇 埋れていたやつが現はれたのだ

一步海がつまづいたとき

出来たそれは足だ

足は波に洗はれていた 十文半割られ

足は島を失いつづけ 〇 た

〇 〇

魚

魚の眼

バラのバンバン うなぎの令嬢

細くて長い學者の頭

光らない太陽

黄色い流れ ハツカの酔

ひとくがさばつた

背後の壓力

卵と鞭

藁縄 わらくす

空からさかさに

さがつた

魚の眼の中のもの

小倉 倉三

俳句

安達眞弓

離被架

妻開腹手術入院二旬余

妻よわられ夫ふはけふの冬日のみ

むさんなるいのちに霜の團畔りぬ

空のまほら霜満ち昏睡つづけり

寒燈細め生死をわかつ闇つくる

寒曉紅むさばる妻の鼻梁のみ

霜しづく個室の尺土ひびかしむ

病廊を寒厨となし葱さざむ

綿虫のほろびし後も唇渴くか

スイトビー華燭の彩と恃みをり

妻措き來し枕木ごとに霜噴くころ

妻ぬぬ家路霜の灯しらにつきあたり

猪狩哲郎

手術前

歸る雁体重計のわれ輕し

梅雨晴へ手記燒き却つる煙上ぐ

病学生書見たゆまず夏兆す

百日紅麦飯つづく患者食

屍室への道秋草がかくすなり

野分すや背曲げて急ぐわが主治醫

狗子草肥えて嘆ける一患者

虫のこえ未治癒退院相次げり

露の土に魂ぬけし蛾なりけり

鰯雲無菌患者等町へ出す

猪狩與四男

虎杖の芽

土白く麦青く海近きらし

汽車の煙青麦を這ひすぐに消ゆ

かたき葉の二三除きしつばき挿す

茶を揉めり米軍の古きズボン穿き

虎杖の芽あかし一切を忘るべし

河鹿鳴く宿の襖は馴れぬ模様

春晝の乳母車遊園地を横切る

春晝の遊園地の草鶏來て食ひ

ウマゴヤシ遠きトラツク地をゆする

海の虹漁夫は甲板上に揺る

菊地秋歩

祖母の家

若草に養地しくらきニユースばかり

マラソンの難所花茶の海つづく

陽炎に臥す犬われを通しけり

桃の里に踏ん込みて市の野犬狩

葉櫻となれり家出の時失ひ

苗代の農夫柔らかく身をこなす

田舎馬わがねざらふに海を見る

祖母の家しきいの際までウマゴヤシ

青大将家に消ゆとき祖母死ぬとき

夏いたはる兵隊で死なざりし身を

高木公園

五月嶺雪

五月嶺雪皚皚耀るをふりかぶり

太陽が冷たし潮風に曝し

さら／＼と根雪を汚崖の粉

網擔ぐ汗の入墨女の名

雪解三跡を湯解く蹴るの前

赤井嶽

楓の花鐘鳴れば磴に散るらしく

躓いて黒き山の蛾おどろかす

廢礦山水およぎさる山つ蟻

吾が町の海輝ける新樹群立つ果

廊の隅経書は厚く山冷えす

蛭田親司

夏はじまる

額に觸れ落つ羽蟻や峽の夏はじまる

阿伽井嶽

趾爪疼く癢山踏むや栗の花

新樹光短かさ言葉杣と交はす

杣の籠小さく負へり獨活充たし

青銅佛耳染くろく垂る新樹光

堂柱固し夏山の冷えそびらにし

蜂の音一つ峰寺の冷えに澄む

花山の難踏遠方に墓地の櫻

初桜焚けば燐爐の熱匂ふ

胸病む咳受け來落花に身をうたす

深澤啓三

孤歌

山に唄ふ

残雪に男の山毛櫨山のかぐるしや

春浅く男山山毛櫨山鳩鳴くも

笹子鳴く女山笹山日没りつつ

裾山もよべの班雪を露の藁

春雪の山毛櫨の幹の班日浴びそむ

君目醒めけらしや曉の秋の虹

秋風や見えて人攀づ火口壁

雪溪よ小山羊は草に膝よこれ

鶯にはや夜のいろの雪溪よ

雪嶺の昏きに蛙ひびきけり

町田音彌

雪現れて

父亡き家父の座に鵲低とばし

稻架なくて怒濤の如く冬寄せ來

冬没日薄き吾が影押して入る

雪現れて多くは歡樂街に降る

木枯の歡喜人皆ののしらる

咳くやかくまで激し女臭憎惡

盲目白杖萬象木枯しとなりて寄す

マスクはずせば胸中の歎どつと出る

生くる事言はんと葬の列くする

番場黒耀子

ズリ山

瘧えぬ身をあしらひかねて寒つばき

金策盡きて額かくせり冬帽子

職さがしあぐねし夜々の虎落笛

虎落笛妻内職の手ゆるめず

女哀れ野分の坑に夫のまれ

なけなしの銭や野分の職買へり

月を背に小作田を掻く一礦夫

「麦笛の一句を寄せて戦犯を喚醒せしむ女ありしに」

麦簞のながれゆく鐵窓高し

酒買ひの妻を追越夕野分

原型創刊號

昭和三十年八月一日印刷

昭和三十年九月一日發行

編集人 菅田甫

安達眞弓

發行所 平市田町五七 原型社

定價三十四

敬啟者
小女于四月
初五日
與子婿
成婚

三猿文庫

014/42